

商社のデスクで今日も頑張り終えた私は、肩を軽く回しながらため息をついた。

「ふう……やっぱりジム通おう。残業続きで体が重いもん」

28歳になってからも仕事は好きで、前向きに頑張っているつもりだけど、最近は少し疲れが溜まりやすい。

ストレス発散に新しいスポーツジムに入会を決めたのは先週のことだ。

明るい気持ちで自動ドアをくぐると、爽やかな空気が迎えてくれた。

受付カウンターに向かいながら、私は小さく微笑んだ。

「こんにちは、入会手続きをお願いします」

カウンターの向こうにいた男性スタッフが顔を上げた瞬間、私は少し首を傾げた。

(……ん？ どこかで見たことあるような……？)

黒髪が少し長めで前髪がかかる、整った顔立ち。

180cmくらいの長身で、

ジムスタッフのポロシャツの下に引き締まった体がかがえる。

笑うと目が細くなる、

ちよつと犬っぽい可愛らしさが残る青年。

でも、すぐにピンとこなかった。

「えつと……会員証の作成ですね。

こちらの用紙に記入をお願いします」

彼の声は低めで落ち着いていて、

事務的な対応なのにどこか柔らかい。

私は用紙を受け取りながら、

もう一度彼の顔をちらりと見た。

(うーん……どこかで会ったことあるよね？ でも思い出せないなあ)

名前を書いていると、彼が少し身を乗り出して小さな声で言った。

「……みうちちゃん？」

私はペンを止めて顔を上げた。

「え？」

彼の目が、嬉しそうに細くなった。

抑えきれないような、犬が尻尾を振ってるみたいな笑顔。

「やつぱり……佐倉みうちちゃん、だよね？」

その瞬間、ようやく記憶の片隅が動いた。

「あ……ゆうくん？」

彼は、高嶺悠真。

地元で近所に住んでいた、8歳年下の男の子。

昔は「可愛いお姉ちゃん」と慕ってくれて、

私が頭を撫でたり、ぎゅーつと抱きしめたりして可愛がっていた、あのゆうくん。

でも、8年経ってすっかり大人っぽくなってる。

最後に見たときは、まだランドセル背負ってたのに……。

背も高くなって、声も低くなって、  
正直、最初は全然ピンとこなかった。

「うわー、本当にゆうくん!? びつくりした〜！  
こんなところで会うなんて！」

私は明るく笑って手を軽く振った。

昔みたいに頭をなでようとして、途中で止めた。

(……もう、そんな歳じゃないよね)

ゆうくんはカウンター越しに少しだけ近づいてきて、  
笑顔を崩さないまま言った。

「みうちちゃん、全然変わってない。  
本当に可愛いままだね……」

その視線が、昔の「可愛がってくれるお姉ちゃん」  
を見る目とは少し違う気がして、私はなんとなく照れくさくなった。

「ふふ、ありがとう。ゆうくんこそ、めっちゃ大きくなったね！  
背、高いし、かっこよくなったじゃん」

私は入会手続きの用紙を書きながら、  
軽い調子で続けた。

「ここでバイトしてるの？ 大学で上京してきたんだ？」

「うん。……実は、みうちさんの近くに住みたいと思って、上京したんだ」

最後の部分は少し小さかったけど、  
ちゃんと聞こえた。

（え……？ まあ、お世辞か冗談だよね？）

私は笑って誤魔化した。

「へえ、頑張ってるんだね！

じゃあ、これからお世話になるかも。

よろしくね、ゆうくん」

用紙を渡すとき、彼の指が私の指先に軽く触れた。

ただの事務的な動作のはずなのに、  
その感触が妙に意識されて、  
私は無意識に手を引いてしまった。

ゆうくんは笑顔のまま、  
でも真剣な目で言った。

「俺、もうすぐ20歳になるよ」

「……そっか！ おめでとう、ゆうくん！」

私は明るく返したけど、  
正直、ピンとこなかった。

「今の私と同じ歳になったら……」  
みたいなこと言ったような気もするけど、  
ほとんど覚えていない。

ゆうくんは可愛い弟みたいな存在だったから、  
なんかお酒飲もうねみたいな話だったけ……？

「じゃあ、またトレーニングの時にね」

ロッカールームに向かいながら、  
私は小さく首を振った。

（ゆうくん……あんなに小さくて可愛かったのに、  
すっかり男の子になってるんだ）

懐かしい気持ちは確かにあった。  
でも、それ以上でも以下でもない。

ただ、久しぶりに会った幼馴染みたいな子が、  
予想以上に成長していて、  
少しだけ「へえ……」と思っただけ。

私は自分の頬がほんのり熱くなっていることに気づきながらも、  
すぐに明るく考え直した。

「よし、今日から頑張つてトレーニングしよう！」

まだ、私はゆうくんの視線に隠れた熱や、  
8年間彼がずっと抱えていた想いに、気づいていなかった。

ジムに通い始めて3日目。

私はいつものように仕事終わりにウェアに着替えて、トレーニングフロアに向かった。

商社のOLとして毎日頑張ってるけど、

ジム来ると少しでも肩の荷が下りる気がする。

前向きに「今日も少しずつ体を変えていこう！」  
と思えるのが好きだった。

マシンを選んで軽くストレッチをしていると、  
後ろからゆうくんの落ち着いた声が聞こえた。

ゆうくんは次の会員さんに声をかけた。

「山田さん、今日はレッグプレスから始めますか？  
重量、確認します」

山田さん（40代くらいの男性会員）が「ああ。頼むよ、高嶺くん」と言うと、  
ゆうくんは淡々と頷いて指導を始めた。



本当にドライで、必要最低限の言葉だけ。

他の女の子の会員さんが近づいてきても、同じようにそっけない対応だった。

（ゆうくん、仕事中は意外とクールなんだ……）

私は少し感心しながら、自分のトレーニングを再開した。

少し経って、ゆうくんが私のところに戻ってきた瞬間――  
表情がガラッと変わった。

「みうちちゃん！ 今日も来てくれたんだ」

目が細くなって、尻尾を振ってるみたいな嬉しそうな笑顔。  
さっきまでのクールなスタツフとは別人だ。

「ゆうくん、おつかれさまー！  
今日もバイト頑張ってるね」

「うん。みうちちゃんのパーソナル、俺が担当してもいい？」  
少し甘えたような目でそう言われて、  
私は思わず笑ってしまった。

「えー、いいの？」

じゃあお願いしちゃおうかな。

よろしくね、ゆうくん」

ゆうくんはすぐに私の隣に寄ってきて、

フォームのチェックを始めた。

最初は普通の指導だったのに、徐々に距離が近づいてくる。

「ここ、肩の位置もう少し下げるといいよ」

そう言いながら、ゆうくんの大きな手が私の肩に軽く触れた。

温かくて、ちよつとだけ長めに置かれる感触に、

私は小さくビクツとした。

「みうちちゃん、姿勢いいね。頑張り屋さんなんだろうな」  
褒められると素直に嬉しくなつて、私はカラッと笑った。

「ありがとう！ 仕事も頑張ってるつもりだよ。  
残業多いけど、毎日前向きにいこうって思ってるの」

ゆうくんは私の言葉を聞くと、目が細くなつて嬉しそうに笑った。  
もう、完全に懐いた子犬みたいな表情だ。

他の人には絶対に見せない、私にだけ見せる顔。

トレーニングが一段落ついた頃、

ゆうくんが私の耳元に少しだけ顔を近づけてきた。

「ねえ、みうちちゃん。あと5日で俺、20歳になるよ」

「……へ？」

私はダンベルを持ったまま首を傾げた。

「そっか！ もう20歳なんだね。大人だねえ」

軽く頭をなでてあげそうになって、慌てて手を止めた。

ゆうくんはそんな私の反応を見て、

ちよつと拗ねたような、でも甘えた声で言った。

「みうちちゃん……本当に覚えてないの？」

「え？ 何を？」

「昔、お別れの時に言ってくれた約束。

『今の私と同じ歳になったら、彼女になってあげるよ』って」

私は一瞬固まつてから、ぷつと吹き出した。

「えー!? そんなこと言ったわけ？ ごめん、全然覚えてないよ。」

軽く言っただけだと思っただけ……ゆうくん、本気で覚えてたの？」

ゆうくんは少し寂しそうな顔をしたけど、

すぐにまた犬っぽく笑顔に戻った。

「うん。本気だったよ。」

俺、物心ついた時からみうちちゃんのこと、

近所の可愛いお姉ちゃんじゃなくて……ずっと好きだったから」

その言葉がストレートすぎて、

私は少し頬が熱くなった。

でも、年下の可愛い弟みたいな子が本気で言ってるなんて、まだ受け止められなかった。

「ふふ、ゆうくん可愛いなあ。

弟みたいに思ってたのに、そんな風に思ってくれてたなんて……嬉しいけど、歳離れすぎだし、冗談だよね？」

私はカラツと笑って誤魔化した。

ゆうくんは私の反応を見て、ちよつと悔しそうに唇を尖らせた。

でもすぐに甘えた声で続けた。

「冗談じゃないよ……」。

みうちちゃん、俺のことまだ弟みたいにしか見てないんだ？」

そう言いながら、彼は私の腰に軽く手を添えて、フォームの修正を装って体を近づけてきた。

温かい体温と、かすかなシャンプーの香りがして、私は無意識に息を詰めた。

「ゆ、ゆうくん……ちよつと近いよ？」

「ごめん。でも、みうちちゃんの匂い、懐かしい……」

声が低くて、少し甘えるような響き。

私は慌てて笑ってその手を優しく払った。

「もう、ゆうくんったら！　今、トレーニング中だよ？  
ちゃんと指導してよね」

心の中では少しざわついていたけど、

私は自分に言い聞かせた。

（ゆうくん、懐いてきてるだけだね。昔の延長……きつと）

トレーニングが終わりに近づくと、

ゆうくんはまた耳元で小さく囁いた。

「あと5日だよ、みうちちゃん。4月25日。  
誕生日、絶対に覚えててね？」

私は明るく手を振って答えた。

「わかったわかった！　じゃまたね〜」

ロッカールームに戻りながら、

私は自分の胸が少し速く鳴っていることに気づいた。

（……ゆうくん、なんか雰囲気変わったなあ。

でも、その分私も歳取ったし、まだ可愛い弟枠だよね）

そう思いながらも、肩に残る彼の手の感触が、  
妙に意識されてしまった。

誕生日当日、ジムの営業時間が終わった頃。

私は少し疲れた体を引きずるようにして、

プライベートトレーニングルームのドアをノックした。

ゆうくんから「誕生日だから少しだけ残っててくれない？」

とメッセージをもらって、軽い気持ちで了承してしまったのだ。

「まあ、ゆうくんの誕生日だし、

おめでとうくらいは言っておきなきゃね」

そんな風に自分に言い聞かせながらドアを開けると、照明が少し落とされた広い部屋が広がっていた。

壁一面が鏡張り、私とゆうくんの姿が何重にも映っている。

ゆうくんが一人で立っていて、

私の姿を捉えた瞬間、目がぼつと輝いた。

「みうちちゃん……来てくれたんだ」

声が少し掠れていて、普段のクールなスタツフの顔は完全に消えていた。代わりに、そこにあったのはみうにだけ見せる、甘えた子犬のような表情。

瞳が熱を帯び、唇がわずかに緩んでいる。

「ゆうくん、お誕生日おめでとう！ 20歳なんだね。はい、これちよつとしたお菓子だけど食べて！」

私は明るく笑って近づいたけど、

ゆうくんはゆつくりと私の前に立ち、

ドアを静かにロックした。



「わあ、ありがとう。プレゼント嬉しい」

ゆうくんは、可愛い笑顔で受け取ると、少し黙って、真剣な顔で言った。

「みうちちゃん……俺、今日から本気だよ」

その真剣な眼差しに、

私は少し後ずさりしそうになった。

「え？　ちよつと待って、ゆうくん……」

言葉を遮るように、ゆうくんは私の両手を優しく包み込み、鏡の前に連れて行った。

大きな手が温かくて、指先が少し震えているのが伝わってきた。

「8年間、ずっと待ってた。

あの時、みうちちゃんが軽く言った約束だっけわかってる。でも俺は本気だった。

これで俺たち、もう大人だよね？」

彼は私の顔を両手でそつと持ち上げ、額に唇を寄せた。

ちゅっ……と、柔らかい音が静かな部屋に響いた。

「まずは、ここから……」

額に優しくキスをしたあと、ゆつくりと右の頬へ。

唇を押し当てる時間は長くて、温かい息が肌にかかる。

左の頬にも、同じように時間をかけてキス。

私は心臓がどくん、と大きく鳴るのを感じた。

「ゆうくん……これ、キス……?」

「うん。みうちちゃんの唇、8年間夢見てたから……ゆつくり味わわせて」

ゆうくんは私の顔を優しく包んだまま、

唇の端に軽くキスをした。

角度を変え、何度も小さく唇を重ねる。

本当に慎重で、一つ一つの感触を確かめるようなキスだった。

やがて、彼の唇が私の唇に重なった。

最初はただ触れるだけ。柔らかくて温かい。

「……待つて。こんなに待ち望んでたのに……頭、真つ白だ。

何も考えられない……ただ、みうちに触れてるってことしか……」

そう言いながら、

ゆうくんの唇が何度も私にゆつくりと落ちてきた。

「8年間……毎日、みうちの唇を想像してた。

でも、実際に触れたら……想像以上で……何も考えられないよ……」

彼の息が荒くなり、瞳がとろけるように熱を帯びていた。

徐々に深くなり、舌がそつと私の唇をなぞった瞬間、

ゆうくんの体がびくつと震えた。

「ん……みうちちゃん……柔らかい……」

キスをしながら、彼は自分でも驚いたような声で呟いた。

その瞬間から、ゆうくんのキスは一気に深く、貪るように変わっていった。8年間の想いが溢れ出るように、角度を変えながら何度も舌を絡めてくる。

私はその夢中なキスに翻弄されながら、心の中で小さく動揺した。

（ゆうくん……こんなに必死で……）

さらにキスは深くなり、

ゆうくんの舌がそと私の舌をゆっくりなぞった。

「ん……♡」

私は小さく声を漏らし、体がビクツと反応した。

ゆうくんは、一度唇を離し、私の目をじつと見つめた。

鏡に映る自分の少し驚いた顔と、

ゆうくんの熱っぽい瞳がはっきり見える。

「みうちちゃん、目、逸らさないで……可愛いよ。俺だけに見せて」

湿った音が「くちゅ……ぬちゅ……」と小さく響き始めた。

ゆうくんは本当にじつくりと、角度を変えながら舌を絡めてくる。  
私の舌を優しく吸い、絡め、時には優しく押し返すように動かす。

キスが長く続きすぎて、息が苦しくなるくらいだった。

「ん…♡…ふう……は……ゆうくん……」

私は無意識に太ももを軽く擦り合わせた。

下着の中が、じんわりと熱を持って濡れてきているのが自分でもはっきりわかった。

（やだ……キスだけで……こんなに濡れちゃってる……）

ゆうくんの表情は、夢中そのものだった。

眉を少し寄せ、瞳を細めて私を見つめながら、  
甘えるように舌を動かしている。

時々キスを浅くして、私の瞳をじつと見つめ、  
また深く絡めてくる。

その繰り返し、たまらなく甘くて淫靡だった。

「んちゅ……れろ……くちゅっ……」

湿った音が鏡張りの部屋に反響する。

私は息が上がって、膝が少し震えていた。

ゆうくんは私の腰に片手を回し、優しく引き寄せながらキスを続けた。

彼の胸板が近くて、体温が伝わってくる。

ようやく唇を離れた時、ゆうくんの唇は少し赤く腫れていて、  
瞳がとろけるように甘かった。

「みうちちゃん……キスしてるだけで、こんなに感じてるの？」

彼の指が私の頬を優しく撫でる。

私は真つ赤になって、慌てて目を逸らした。

「ち、違うよ……ただ、びっくりしただけで……」

でも、下着の奥が疼くような感覚は嘘じゃなかった。

キスだけでここまで反応してしまうなんて、予想外すぎて頭がぼうつとする。

ゆうくんは優しく微笑んで、

再び私の唇に軽くキスを落とした。

「可愛い……みうちちゃんの反応、全部俺のものにしたい」

つづくー